

# 全国各地から企業家ら集う

## 第1回神在月・縁むすび世界大会



小松電気社長ら5人がパネラーとなりパネルディスカッション

### 精神文化などを討論

「人類は二十世紀から二十一世紀にさしかかり、国家論・世界観を再構築するために作業を進めています。」

しかし、多くの国際問題については、国家感の見解は行違ひのままで、共通の接点は見出していない。地域・国内・国際問題が解決できない根本的な原因は「人間どうしの信頼関係がまだ築かれていないため」ということに気づいた。

二十三日に松江市のくびきメッセで開かれた「第一回神在月・縁むすび世界大会」（世界八百万委員会主催）の基調文の一節。二十一世紀に向けて出雲から「出会い・議論・チャンスそして創造」の場を世界に提供しようと日本各地から十五人の学者・企業家らが集まり、未来のテクノロジー、

精神文化についての討論会が行われた。

同会は昭和六十三年に小松電気産業株式会社（八束郡八雲村）の小松昭夫社長などの呼びかけで始まった起業家セミナー「知革塾」が発端となつて、財・官・民が一体となつた研究会「神在月縁むすび全国大会」（平成六年）をステップに実現した。二十三日の大会では評論家・草柳大蔵氏、思想家・久司道夫氏の講演の他、パネルディスカッション、テクノロジーと人間文化を考える四つの分科会が開かれた。

このうち、社団法人ニュービジネス協議会の下村澄相談役がコーディネーターとなり、小松社長など五人がパネラーとなったパネルディスカッションでは「不信任が生まれるのは言葉が原因となる。これを研究し、相手の立場にたつてもをみるのが、相互理解につな

がるのでは」（中村豊秀・有限会社ヒューマンコミュニケーション社社長）「どんな立派な男でも、女の子宮を経ない生存できない。だから、女が立ち上がると世界が変わる」（久司アベエリーヌ僭子・久司道夫夫人）といった意見がだされ、会場に集まつた約五百人の参加者たちに「相互理解と世界平和」を訴えかけていた。